数字の裏にあった命の重み

山﨑　芽衣（中学１年生）

「犠牲者は数字ではなく人で、全員に顔があった」

この言葉は、糸数アブチラガマを案内してくれた方の一言です。この言葉に私は強く心を動かされました。

テレビやインターネットで犠牲者や負傷者の「人数」ばかりを目にしていた私は、今までその数字の裏にいる“人”の姿を想像することがほとんどなかったことに気づかされました。

それと同時に、約 80 年前の沖縄戦で、この糸数アブチラガマという場所で、私たちと同じくらいの年齢の人たちが遺体の処理や怪我人の手術など、想像を絶する体験をさせられていたという現実を目の当たりにしました。戦争がなければ、彼らも今の私たちと同じように学校生活を送り、友達と笑い合っていたはずです。しかし、戦争によって“当たり前”が簡単に壊されてしまった――そのことを、実際に戦争が行われた沖縄の地で改めて実感しました。

特に衝撃を受けたのは、沖縄戦では正規の軍人よりもはるかに多くの一般住民が犠牲になっていたという事実です。沖縄の方言を話すことでスパイと疑われ、拷問や虐殺を受けたり、泣き止まない乳幼児がいるためにガマ（自然洞窟）を追い出されたり、米軍による無差別な砲撃で命を落とすなど、当時の住民たちがどれほど過酷な状況に置かれていたのかを知り、恐怖を感じました。

今回の平和学習に参加して、実際にガマの中に入り、写真や文章では伝わりきらない当時の人々の気持ちに少しでも触れられたような気がします。これまで「戦争はよくない」と漠然と思っていた私ですが、今回の体験を通じて、「戦争は絶対に起きてはいけないこと」だと心から強く思いました。

少しでも戦争や平和に興味がある人は、ぜひ現地に足を運んで、自分の目と心で、80 年前の現実を想像してみてほしいです。